



田中未来

— 『エミール』に見せられて —

黒田 瑛
白梅学園短期大学 元学長

田中未来先生の ヒューマニズムの唱道と実践

— 人間としての育ちと自己実現の援助 —

はじめに

田中未来先生の突然のご逝去から3か月が過ぎた。先生の思い出を寄稿するように求められ、あのこと、このことと心に浮かぶ事柄を書き出してみた。B4版の紙にすぐ一杯になった。私は白梅の教育に加えていただいて以来、31

本論は黒田瑛先生の存命中に発表されました。前半は本学紀要第36号、後半は田中未来先生追悼録によるものですが、田中先生を知る大変適切な内容であるため、ご遺族のご了解を得て再録させて頂きました。

年にわたり先生から懇切なご指導と親しいお交わりをいただいた。亡くなられたあと、先生を慕う心を同じくする方々と語り合い、先生の書かれたものを読み返すうちに、沢山の断片的な思い出が互いに関わりをもち、そのご生涯をつらぬく信念と、一貫した生き方が鮮明なものとなってきた。

田中先生は東京家庭学園から白梅学園保育科、そして白梅学園短期大学と、自ら教授、学科長、部長、学監、そして学長、理事として学園づくりにかかわること54年におよんでいる。学園の創立者・小松謙助氏や小松(後に樋口)愛子元学長らを助けて学園の基を据え、その発展に尽くした

功績は大きい。また、その働きはひとり学園のためのみならず、中央児童福祉審議会や全国保母養成協議会(現、全国保母士養成協議会)、以下同様を通じて厚生行政に働きかけ、保母(現、保育士、以下同様)養成の充実と保母の専門性の向上に努めたことも先生の功績に数えられる。

先生のルソー研究も、早稲田大学の学生の時にはじまり50年を超える。私も教育学を学び、授業を担当するものとして、先生のルソーの自然観や人間論から教えていただいたことも多い。

田中先生は、主張のはつきりした教育・保育思想家、そしてすぐれた研究者であったが、私は、先生はやはり、まづ教育者でいらつしやつたと思う。沢山の思い出のなかり、特にその点から先生の教育の理想と実践に絞って記すことにする。

1. ヒューマニズムの信念と思想の形成

田中未来先生の生き方の全てを見事に一貫していたのは、ヒューマニズムの精神の探求とその実践であった。ヒューマニズムは、人間の尊厳を重んじ、人間を人間として生かし、自らも人間らしく生きることに努める精神である。子どもの教育の発展と、福祉の向上が先生の生涯の課題であった。成長・発達の援助としての教育と、生活と発達の条件の保

障としての福祉は人間尊重の理念において統合されるとする。これは田中先生の説くヒューマニズムの特長である。

人間教育と自己実現の援助への関心は、先生が小学校5年生、10歳の時に始まる。自らも虚弱で体操の授業を休みがちであった先生は、体操の時間に、いつも同じように教室に残されていた知的障害のある2人の子どもに話しかけ、文字の読み書きを教えてみた。ゆっくりではあったが、その子どもたちが口を開き、文字を覚えはじめた。いじめられて、いやなことは、「いや」と自己主張をするようになった。この経験とこの時の感動を何度か先生から伺った。このことについては、先生の『生きること・育てること』(福村出版、1987)に詳しいが、そこに「人の心に働きかけてゆく仕事、つまり教育の道に進みたいと、この春(小学校6年生―筆者)、思いを固めた」とある。

田中先生が育たれたのは大正中期から昭和にかけてであったが、当時の新しい自由な教育の指導者の何人か(山本鼎、石井亮一ら)との直接の出会いを経験していらつしやる。また、戦争に向かい、国家主義教育が強くなるなかで、女学校から女子大学とキリスト教主義の教育を受け、人間と社会を深く考えて学んでこられた。これらの経験は、ヒューマニズムの理念に立ち、その実践に励もうとする先生の原点となったものと思われる。

先生は1942(昭和17)年に早稲田大学文学部哲学科に教育学専攻の学生として入学された。戦況の激化とともに、学生たちは学徒出陣や勤労動員で、あるいは戦地に、あるいは軍需工場や働きの場に出て行った。同時に入学した、専攻を同じくする二十数名の学生のうち、終戦後学窓に戻り、卒業できたのは田中先生ただ一人であった。この間にあって、先生がさまざまな出会いと別れを通じ、国と社会の激動の中で重ねた体験と思索は、人間を愛し、人間の価値を高め、互いの自己実現に努めようという、ヒューマニズムの信念と生きる目当てを一層確かなものとした。そして田中先生の東京家庭学園および小松(後に樋口)愛子元学長との出会い(1945(昭和20)年5月)もこのなかでのことであった。

私は、田中未来先生の早稲田大学卒業論文『文藝教育に関する一考察』(1946年7月)を目にする機会を与えられた。これは後年(1992年)、80頁の冊子にまとめられている。論文は当時日本の教育全般、ことに積義に偏る国語教育に対する批判の上に立ち、人間を知り、人生を考え、人間としての成長に資するものとして文藝教育のもつ意義とその教育の在り方を論じている。

この主題は、東京女子大学の国語専攻部を経て早稲田に進まれた田中先生であったからこそ取り組むことができたものであった。ヒューマニズムの精神に立つ基本の姿勢、

そしてルソーの『エミール』への傾倒は、先生24歳時の論文にすでに明らかであり、これは終生変わらぬものとして生涯を一貫している。読むものを惹きつける筆力と、強い説得力をもつ鋭い筆法は早くもこのころ確立されており、先生の面目躍如たるものがある。

2. ヒューマニズムの教育

ヒューマニズムに立つ先生の姿勢は公私にわたり、その全ての生き方に未通って鮮明であった。学監、学長、理事としての学園の運営・管理と教学の全般におよんでこの姿勢を可能な限り貫こうとしていらつしやったことは枚挙にいとまがない。全国保母養成協議会など全国的な組織や機関においても、この立場から指導的な役割を果たしてこられた。これらの詳細については割愛せざるを得ない。

ヒューマニズムの教育という点で私の心に残るのは、教師・教育者としての田中先生の強い意志と、時には少し強引なまでの自己主張である。その主張と実践の成果の一端を、白梅の教育の特色ともいえる教育の方法と内容について記すことにする。

(1) 教養教育で「ヒューマニズム」を

―カリキュラムの工夫・自ら講義を担当―

カリキュラムのなかに人間を考え、時代と社会を知り、

人間の歴史と生き方に思いをいたす学習の場を設けようとする工夫と努力がつづけられた。その第一は、学監としての田中先生の提唱により、昭和50年代初めに総合科目「人間」を教養教育(当時は一般教育と呼ばれていた科目のなかに開設したことである。総合科目とは大学教育のなかで、学問の境界を越え、一つのテーマについて多角的な研究を互いに関連づけて教えようとするものであって、当時は、4年制大学も含めこの総合科目の教授法の研究が始まったばかりであった。白梅においては4単位の科目として「現代と人間」「生・死・愛・生きがい」「男性と女性」など様々な副題を立てて、人文・社会・自然の諸科学の多様な専門分野から、主題をめぐり複数の教員がチーム・ワークをとりながら講義に当たった。多くの場合、田中先生自身もこの一員に加わって科目を担当された。時には、学期末にその年度の担当教員全員が出席してパネル・ディスカッションを行い、学生たちに一つの問題をいろいろな面から考える意味と楽しさを知らせようとした。保育・教養・心理技術(現在の心理学)の3学科の全学生を対象とする選択科目として開講されていた。

第二は、学長を退かれたあとであったが、1989(平成元年)年から教養教育科目「哲学」を担当された。講義の前半ではヘブライズムとヘレニズムから説きおこして、ヒュ

ーマニズムの系譜を明らかにし、ヒューマニズムの視点からルネサンス以降の近代の思想を論じ、後半で現代の諸問題をとり上げ、今日に生きる指針としてのヒューマニズムの概念を明らかにしようとした。扱う内容のレベルが高く、また事柄が多岐にわたっている。先生は学生のために詳しい資料を用意された。私も1セットいただき、良い参考資料として大切にしている。先生の丁寧な授業と問いかけにより、学生たちは戦争と平和、科学技術と人間、人間の幸福と自己実現、人間としての権利と人間らしい生き方・在り方などについて考え、話し合い、田中先生との質疑応答を重ねる機会を得たのであった。

そして第三として、短期大学設置基準等の改訂により教養教育科目に変更があったのを機に、1995(平成7年)から遂に全学卒業必修の教養科目として、「ヒューマニズム論」(2単位)が設けられることになった。この科目のねらいは、人間を考え、思想の歩みを辿り、現代の諸問題を取り上げるなかで、ヒューマニズムの意義と系譜を明らかにしようとするものであった。田中先生はこの時は退職され、講師のかたちであったが、「ヒューマニズム論」は先生が中心となって担当され、筆者もお手伝いをした。白梅に学ぶ全ての学生に、学園の礎って立つ理想をしつかり伝えようとする先生の意気込みに対し、学生たちの熱心な応答

や真剣に考えたレポートの提出もあり、先生と打ち合わせを重ねて授業に備えた筆者の励みにもなった。田中先生の白梅での最後の授業は、この「ヒューマニズム論」の結びとしてのヒューマニズムの課題に関する授業であった。

この他、田中先生は入学式や卒業式の学長告示をはじめあらゆる機会をとらえてヒューマニズムを語り、学生と教職員に人間を考え、人としての在り方と人間の生きる目的を考えることを願い、求めていらつしやつた。

1989(平成元年)年3月に行われた田中学長退任記念講演のタイトルは「序説、近代ヒューマニズムの系譜」であった。これまでの研究を整理し、まとめられた講演であったが、先生は、謙遜にも、これをもつてヒューマニズムについての今後のご自身の研究のスタートとされたのであった。講演の記録は冊子にまとめられている。

(2)ゼミナールの重視

― 学富力を育てる ―

白梅学園短期大学の教育の特徴は、昭和30年代から、I部・II部ともにゼミナールを実施してきたことである。全国的にみても、短期大学の教育のなかで、非常に早くからこれを実施してきたことになる。これは、学生の可能性を信じ、一人ひとりに潜む力をできる限り伸ばし、高めたいたとする田中先生の強い主張とリーダーシップとによるもの

であった。社会福祉や児童福祉、保育・幼児教育の現場の見学や調査なども含め、少人数のグループの学生たちが、教員の指導のもとに一つの主題により1年間にわたって、文献研究や話し合いなどを行ってきた。資格や免許を付与する短大の忙しいカリキュラムのなかで、学生たちの自主的な活動と体験・経験を大切にし、その主体的な学習の場を確保するには大変な努力を要する。学生に学富力、保育者として共に育つ力を身につけさせようという願いからであり、白梅の学生は仕事についてから育つという定評を得てきた。専攻科の教育においては、研究方法や調査法についての丁寧な教育にはじまり、修了研究論文作成を旨とする指導に力を入れている。田中先生は詳しいシラバスを作って長く保育研究法を教え、専攻科のゼミナールと論文指導を学生との「真剣勝負の時」としてこれに取り組んでおられたのを憶えている。

ゼミナールが発展し、卒業生や、時には白梅以外の保育者や保育・教育に関心をもつ親たちも加えて、田中先生を囲む学びの輪は、まさご会・エミール会・未来の会……と10年、20年、それ以上も続き、今日に至っているものもある。学園の運営に重責を負い、忙しいなかで、いつも、何よりもゼミナールを大事になさり、ゼミナールの時間を他の仕事のために欠かすことはなかった。春や夏の休みに学生

とゼミナールの合宿、旅行に出かけるのを楽しみにしていらつしやつた。

学長になってからは特定の学生たちにだけかかわっていただくのは困るということで、ゼミナールの担当を認められなくなった。しかし田中先生は、授業とかかわりなく、先生と話したいと願う学生たちの学長室への来訪を歓迎し、その時は教養科の学生たちが中心であつたと思うが、先生を囲む「夢の会」が誕生した。学長室だけではなく鎌倉や京都への旅の宿で、先生をなかに、短大生活や人生・青春を熱く語り合つた思い出は学生たちの貴重な財産となつたことであらう。

おぼえ

たくさんの思い出、田中先生の大きなお仕事のみならず、ヒューマニズムの精神による先生の教育の実践に絞つて記してきた。ご逝去の2日前の日曜日、ご自宅で、先生は「エミール会」のメンバーを前にして、日本の教育の現状と社会の風潮を憂い、日本国憲法を引きながら、自由を守り、教育と学習の権利を大事にすべきことを語られた。これが最後のゼミナールとなつた。

先生の恐らく最後の寄稿となつた『白梅の保育』（白梅幼稚園創立50周年記念誌）は亡くなられたあと、1999（平

成11）年12月に刊行された。先生はここでも、ご自身のヒューマニズムの信念を語り、白梅幼稚園のこれからの働きに期待して、「人間の子どもを人間として育てる」保育を、と願つて稿の結びとした。

先生が私生活においても人間への愛とその信念をいかに実践されたかは、また稿を改めて語るべきであらう。いろいろな困難な事情にあつた若い人々を先生は自宅に招き、住まいを提供し、勉学を助け、実に何人もお宅から他に嫁がせていらつしやると聞く。

「棺を蓋いて事定まる」という。思い出を記すに当つて、田中未来先生の強靱な意志に支えられた人間愛と奉仕のご生涯の一端にふれ、感銘を深くした。先生のご冥福を心からお祈りする。（白梅学園短期大学紀要 第36号より）

生涯にわたる『エミール』の研究

1. 『エミール』に魅せられて50有余年

授業や研究会で、あるいは研修会や公開講座で、田中未来先生が『エミール』を語るのを聞いた人の数はどれくらいになるであらう。何度、語つていらつしやつても、先生が

『エミール』によつて人間や子どもについて、その素晴らしさを説くとき、いつも感動をもつて語つていらつしやつたお顔が、今も目に浮かび、お声がひびいてくる思いがする。本書の巻末にまとめた業績リストにあるように、ご研究の集大成である『エミール』の世界』を初め、『エミール』を主題とする論文や著書も多い。白梅学園短期大学紀要には、『エミール』を中心としてルソーの思想について、平等の理念、愛や労働の教育的意味、そして発達観や宗教観、最後に、自然の意味、とテーマ別に丁寧な考察をまとめていらつしやる。

田中先生のルソーとのかかわりが始まつた時期については、太平洋戦争が終わつたその年（一九四五年）の冬、早稲田大学に戻り、大学生生活を再開した時であつたと記されている。古書店で『エミール』の邦訳を買ひ求め、夢中になつて読んだとある（『エミール』の世界』「はしがき」）。田中先生は文学部3年生（当時の制度では最終学年）として復学、すぐに卒業研究のまとめに取り掛かつた。この時の卒業論文の指導者は、稲毛金七教授であつた。同教授は教育哲学者として今に名を知られ、大部な書『教育哲学』により、該博な知識を披露している。勿論、ルソーについても言及し、教育の基礎とする哲学としては、あまり高い評価を与えていないが、その哲学の獨創性と後世への影響の大きな

点に注目している（『教育哲学』稲毛金七、目黒書店、昭和16年、29項）。翌年の卒論提出時の指導者は、デュイイの著書の訳出で知られる原田実教授であつた。どちらからも近代の教育におけるルソーの史的位置とその思想の意義を学ばれたことと思う。田中先生は当時、原田教授による『民主主義と教育』（J. デュイイ、一九一六）の講読に出席したとのこと、デュイイは批判的な立場からではあるが、同書第7章にルソーに触れて紹介している。

早稲田大学に提出した卒業論文（『文芸教育に関する一考察』一九四六年7月号誠文堂新光社が一九九二年に冊子として刊行。以下、本卒論からの引用はこの冊子による。）では、人間の善性への信頼の上に、人間性を養ひ育てることを教育の働きとし、教育の方法として文芸教育を取り上げている。当時の初等・中等教育における、語句の解釈に片寄り、主として道德主義の立場から教材が選択されていた文芸教育を批判し、教育は根本的にヒューマニズムの立場に立つべきものであるとする。

そこで田中先生は文化としての教育と自然とのかかわりを論じ、『エミール』によつてルソーの思想を紹介して、「ルソーの尊んだ自然とは、実は内なる自然である。内なる自然とは、つきつめて言えば全き意味において人間性に他ならないと思う。人間性こそ、一切の文化を生み出したと

この根拠となるものであつて決して文化に従属するものではない。教育の目標とすべきものも、かかる人間性に在ることは明らかなことであると思う。」(前出書9頁)と述べている。このように早くも、24歳のこの時、ヒューマニズムの教育が、田中先生の主張の中心となり、そしてルソーの『エミール』における「自然」についての考察が始まっている。

次に田中先生の『エミール』研究の特徴とも言えることを以下にいくつか挙げてみる。

① 『エミール』をはじめルソーの著作を40年近くも読みつづけてきて、60代になってさらに原語で読むことを目指し、フランス語の勉強を始めている。森朝子氏によるレッスンが厳しく、毎回の宿題の量も相当のものであったことは、筆者の知るところである。おそらく、ほとんど初歩から学習を始めて、ルソーを読むところまで、田中先生は学監、そして学長としての激務、重責を果しながら、フランス語習得に集中していた。何度となく読んだ『エミール』を原語で読み、単語の意味を語源に遡り、言葉の格によって文章を検討し、正確に、深く読む努力をつづけた。原文で読む努力は、多くの研究者に共通のことではあるが、ルソーを読むために仏語を習ったことは、実に特筆に値することであつた。

② 教育学者としての関心から『エミール』を読みながら、同時に『学問芸術論』、『人間不平等起源論』、『新エロイズ』、『社会契約論』、『告白』その他、ルソー晩年の作品まで読み、その上で、『エミール』に説かれる教育の目標、内容、方法の理解を深めることに努めた。これによって、ルソーの人間観、発達観、社会観、宗教思想そして自然観など、ルソーの哲学、宇宙論まで捉えようとした。これがまさに、田中先生がご自身のルソー研究の集大成のタイトルを『エミール』の世界とした理由である。ルソーの世界の全体を知ることにより、『エミール』の理解を徹底しようとしたのである。

③ ルソーの「自然」の意味の解明をもつて『エミール』を読み解く柱とした。勿論、多くの『エミール』研究者は「自然」の概念を研究のテーマとしているが、田中先生は一九四〇年代なかばから一九九〇年代までに渡り、そして人間、社会から宗教まで、ルソーを論じるときいつもこの「自然」の思想と一体のものとして首尾一貫しているところ見事である。

④ 『エミール』に記されたルソーの思想を、単に教育思想として考察したのではなく、田中先生は自らの人間観、教育観そして社会観確立のための寄り処とした。先生のルソー研究は、半世紀に及ぶ教育者、保育者養成指導者

および、仲間と子どもたちへの愛の実践者としての生き方を賭けた真剣なものであった。今日の子どもの育ちと、子どもの幸せを考え、子どもの権利の保障を願う時、そして現代日本を保育・教育の観点から論じる時、いつも『エミール』から出て、これに帰るのを常とした。

⑤ 『エミール』の学びを長年にわたり、そして広い範囲の人々と共にした。田中先生は白梅学園の教育に力を尽くし、併せて国の保育者養成カリキュラムの編成や改訂にかかわる忙しさの中で、誠に多くの人たちと、(講演会などの席は別として)学生あり、卒業生や保育者あり、親たちを含めてさまざまな人たちと『エミール』を読み合っている。「エミール会」、「エミールを読む会」、「エミールを学ぶ会」、「未来の会」など多くの会を主宰した。ルソーに学び、田中先生は、自ら、また他者とともに生涯学習の実践者であった。

2. ルソーの『エミール』における「自然」の研究を柱に

(1) 「自然」の概念に共感して

白梅学園の学園づくりの導きの理念はヒューマニズムであり、この理念の唱導とその実現に大きな働きをしたのは田中未来先生であった。このたび、その思想のルーツをた

ずねると、それは先にふれたように、早稲田大学に提出した卒業論文に明記されている。

長く激しい戦いの終った翌年に書かれたこの論文は、新日本での教育改革の指標を示さんと志す気概に満ちたものである。教育は文化の営みであり、文化の基は人間、人間の自然(人間性)である。それにもかかわらず、実にしばしば、教育は人間性を損い、人間性の発展を阻害してきた。ここで田中先生は、ルソーの『エミール』にみられる「自然」の概念に共感して、人間の内なる自然である人間性こそ教育の目標とすべきものであると、ヒューマニズムの理念に立つ教育の主張を展開する。この理念の実現の一つの道として、文芸教育を選び『早稲田文学』(昭和21年4、5月号)に掲載された谷崎精一や岩上順一らの所論によりながら、文芸の本質を確認し、文芸教育の在り方を明らかにしようとする。その考察に先立ち田中先生は、まず人間性(human nature、人間の自然)について自らの考えるところ、信じるどころを次のように記している。若き学徒として、そして教育者として人生のスタートを目前にして、論文に残している信念を、少し長いが引用しておきたい。

「私はこのありのままの生きた人間性がその是非の論をさしはさむ余地なく、人間にとつては唯一の深いよりどころであること、又、そのみならず、私どもの実感として、

この人間性は未だ不完全なものであるとはいえ、たしかにその中に美しい性質を含み、又高いものへの志向を抱いていることを信じてうたがわないのである。教育の理想はこの人間性を十全なる意味において開発し、抽象的な概念としての人間性ではなく、この今の社会に生きている人間としての人間性をもっとも完全にやしない育て、かつその内に在る、美しく高きものへの志向をのばしてゆくことである。……」（『文芸教育に関する一考察』、25頁）。

ここにヒューマニズムの教育に生涯を賭けた田中教育学の出発を見ることが出来る。この卒論の結語に「生きた人間をつくるための生きた教育ということは私が遠い以前から考えていた……」（同書、80頁）とあり、これが教育学を専攻した動機であることを語る。

これは一つには、ご両親の方針もあり、末期とはいえ、人間性を大切に、わが国の新教育（大正自由教育）の息吹にふれ、また学童期に障害のある子どもとのかかわりのなかで、人間の尊厳と可能性に感動したことなど、先生のするどい感受性と、小さい時から変わらぬ真剣な生き方によるものであろう。また、女学校や女子大学で出会った、信念に生きる立派な教師たちから、人間の善さへの確信を与えられたのであった。そしてまた一方、昭和に入り、戦時期を経て、終戦にいたるまでの、人間より国家を、個

より全体を重しとする教育への徹底した批判、および自ら求めて入ったキリスト教主義女学校において、「罪人」としての自覚を迫る教育に反撥・批判をおぼえたことにもよるのであろう。これらのことは、田中先生の著書『生きることと育てること』、福村出版、一九八七）に詳しい。

この卒論の結語は短い、簡潔なものであるが、「この後もただこの方向（生きた人間をつくるための生きた教育―筆者）に研究と実践の途を進んでゆきたいとねがっている。」（同書、80頁）とつづく。その生涯をしのぶ今、これを読み返すと、田中先生の生き方の強さとゆるぎない歩みを、改めて思わされる。

（2）教育と福祉の同時保障

終戦後間もなく、田中先生は白梅学園前身の家庭学園に勤務し、その後折にふれ、ルソーの著書を手に取っていらつしやったようであるが、特に強い関心をもって『エミール』を中心として新たに読み始めたのは、一九六〇年代になつてからであった。学園が短期大学として発足して軌道に乗り、新しいスタッフも加わったところで、学園づくりにかかわる考えの違いが表面化してきた。田中先生ら、それまで運営の中核にいた人々に代わって学園の舵をとっていかうとする動きが出てきた。このことについては、田中先生は具体的に詳細を語ることはなかったが、早稲田を卒

えて白梅にかかわって以来、久しぶりに少し時間を与えられた思いであった。ここで改めて集中してルソーを読み、ペスタロッチ、コンドルセ、フレーベルなどの思想をたどるなかで、教育、保育と福祉の関連について考察する機会を得た。その成果は丁度そのころ刊行を始めた『白梅学園短期大学紀要』に「近代における児童教育と福祉との思想的関連について」と題して4回にわたって公にされている（一九六五年、一九六六年、一九六七年、一九六九年）。田中先生は自ら「このころから、わたしの関心の中心は、ルソーにしぼられてきました」（『生きること育てること』、176頁）と述べ、先生を囲む「エミール会」が発足したのも一九六五年であった。白梅のみならず、色々な場で田中先生と出会った人たちが、ただ『エミール』への関心により、爾来、長く学びと語り合いの時を共にしたのが「エミール会」であった。

この時の関心の中心は、ルソーが『エミール』に説く「自然」の示す、自然に従う、子どもの育ちと幸せであり、「自然の秩序」にかなう理想の社会の姿であった。ルソーは子どもが弱いもの、人に頼るほか生きられないものとして生まれることをとりあげ、この要保護性こそが、教育の可能性・必要性の根拠であることを指摘して、エミール第1編に「人間は教育によってつくられる。かりに人間が大きく

力づくよく生まれたとしても、その体と力からだをもちいることを学ぶまでは、それは人間にとつてなんの役にもたつまい。かえつてそれは有害なものとなる。ほかの人がかれを助けようとは思わなくなるからだ。」（『エミール』上、岩波文庫、24頁）と記されている。

また、よく知られているところであるが、『エミール』においてルソーは、人は3種類の教師によつて教育されると述べている。自然と人と事物（環境）である。まず自然による内からの能力や器官の育ちがあり、これにともなつて事物（環境）とかかわる体験・経験からの学習が生じる。これに人（親・教師）の援助・指導が加わるのである。

ここでは、子どもの健康で幸せな育ちを保障することが、教育と一つのものとして捉えられ、福祉と教育の目的は総合的に達成されるべきものとしている。田中先生は『エミール』に学び、かねてからの白梅の「児童の教育と福祉の総合的研修」の方針の正しさに一層確信を持ち、この立場から国の行政への提言など、全国的なレベルへの働きかけも含め、保育者養成カリキュラムの検討と改善に尽力したのであった。

さらに、田中先生はルソーが展開する自然の秩序に従うエミールの教育は、「一方では児童の幸福を守り、他方では、その教育を通じて、来るべき社会のよい構成員をつくるこ

ととなる」(『白梅学園短期大学紀要』、一九六五、49頁)と、ルソーの思いをたどる。そして、この「来るべき社会」こそは、理想の社会、すなわち支配と服従ではなく、「一般意志のもと、人々が自由と平和に生きる社会であつて、子どもたちの生活と幸福を守り、自然の道に従う育ちを保障する社会なのである。この意味においても、ルソーは教育と社会福祉の一体的かわりを説いている。ここに、『社会契約論』と『エミール』が同じ年に公にされた理由があると言えよう。

(3) 「自然」の解釈との生涯の取り組み

先に見てきたように、田中未来先生はルソーが『エミール』その他の著作で使う「自然」の言葉に惹かれ、半世紀をかけてその解釈に取り組んでこられた。この研究のために多くの文献に目を通していらつしやるが、その中でも、早くから参考にしてきたのがアメリカの教育学者モンロー (P. Monroe) の『教育史要説』(A Brief Course in the History of Education, 一九〇七、日本語訳、川崎源とデンマークの哲学者ヘフディング(H. Höfding)の『ルソーとその哲学』(Rousseau und seine Philosophie, 一九三三、W. Richards, J.C. E. Saidaによる英訳、Rousseau and his Philosophy, 一九三〇、日本語訳があるか不明)の2冊であつた。

個人的なことであるが、私が大学2年生の時、「論文作成法」(Theme Writing)の授業で自分で選んだ課題が、「エ

ミール』における「自然」であり、主として参考にしたのがこの両書であつた。そしてその十数年後に田中先生との出会いがあつた。先生と関心を同じくし、同じ文献を手にしたことを知り、嬉しい偶然であつた。

人間の善さ、素晴らしさを信じ、保育・教育の力とその可能性を信じる、先生の理論と実践の要（か）となつたものはルソーが「自然」という言葉で伝えようとした信念と思想であつた。

田中先生はルソーと『エミール』を語る論文や著書を多く出していらつしやり、その書かれた時期により、「自然」の意味内容の捉え方、分け方、重点を異にしている。しかし、一九九〇年代に入つて、ひとまず研究のまとめとして著した、論文『エミール』における「自然」の意味（か）(『白梅学園短期大学紀要』、一九九二)、および『エミール』の世界』(誠文堂新光社、一九九二)の二つでは、どちらも「自然」の概念を5つの意味で捉え、同じ順序で説いている。詳しくは、直接それらを読んでいただくことを期待して、簡単に記すと、次の通りである。

第1は、人間の外にある「自然」である。美しい景色により人に感動を与え、秩序をもつて変化し、暑さ寒さにより人を鍛える自然である。人々は自然の事物とかかわる経験を通して学び、科学する心が育つ。

第2は、人間の本性としての、生得的な性質としての自然である。『エミール』の全編にわたって繰り返し説かれるところは、人は善いものとしてつくられ、生まれながらに直つすぐに、やさしく育つ力を与えられる。愛らしく、賢く育ち成長して、人間として自由に生きるものとして生まれてくる。しかし、その本性としての自然を損い、育ちを妨げるものとしてルソーが批判するのが、当時の人々の習慣や文化であり、社会制度である。

第3は、人間の発達の原動力としての「自然」、人間の内にあるその発達を導き、これを方向づける力としての「自然」である。ルソーの主張するところは、「自然の教育」「自然に従う教育」「自然が示してくれる道」に従うべきことである。

この発達の原動力としての「自然」は第2の人間の本性としての「自然」に含めてもよいとも思われる。しかし、田中先生は、単に生得的な傾向としての本性ではなく、発達を押しすすめる力としての「自然」、成長・発達にかかわるダイナミックな力としての「自然」をこの本性としての「自然」とは別に分類している。これは自然 (a nature) が、nature と語源を同じくし、「生成」「生殖」などの意味を含むことに留意したのであって、教育・保育にかかわるものとして、田中先生の独自の「自然」の解釈であつたと言えよう。

第4は、理想の社会状態としての「自然」である。人々が支配と服従に生きる社会状態に対して、平等に自由に生きる理想の社会を、自然状態にあるいは、自然の秩序による社会という。「人間不平等起源論」(一七五五年)および、『エミール』と同年、一七六二年、に出版された『社会契約論』は、このことを歴史と社会制度の面から説きおこしている。理想の社会としての「自然」に育つのが、自然秩序であり、『エミール』の目指す人間像である。そして、自然の秩序にかなう理想の社会を築く力となるのは、この「自然」の示す道に従う教育によつて育つ、自然人である。これが当時の身分・階級秩序が支配する社会から切り離してエミールを育てる、フィクションとしての教育実験の意味であつたと考えられる。

最後に第5の意味は、神としての「自然」である。「自然」を意志や感情をもつ存在、行為の主体として用いている。「自然は子どもを人から愛され、助けられる者としてつくつた。」(『エミール』上、121頁)あるいは「自然は子どもが大人になるまえに子どもであることを望んでいる。」(『エミール』上、125頁)などがその例である。これは「神」造物主などと叫びかえられている。ルソーは『エミール』第4編でかなりの頁を当てる、「サヴォワの助任司祭の告白」として、神の存在について考察し、宇宙論を展開する。ル

ソアの宗教論とこれを田中先生がどのように理解していたかは、岡本富郎さんが本書に執筆されているので、ご参照いただきたい。

第1から第5までに分けて「自然」の意味を捉えたが、田中先生は、これらの相互の関わりを論じ、「自然」の概念の基をなすものはこの「神」としての自然であり、人間の善性、人間への信頼の根拠となるのは、この神としての「自然」の善性にほかならないとする。そして、『エミール』を中心として、ルソーの人間観、教育観、社会観、宗教論、さらに愛や労働にわたる、その思想構築の根拠となっているのは「自然」の概念である。先生は、その「自然」理解の要訣は、神としての「自然」の意味するところについて深く知ることであると説く。

この神としての自然の理解について、田中先生は繰り返し論じながら、いつも謙虚に、自らの課題として研究の筆をとどめている感がある。ルソーはキリスト教の歴史と風土のなかで育ち、生活し、論理的推論として神の存在とその力の働きを要請している。『エミール』第4編で、その説くところをルソーは自ら自然宗教と称し、それは超越神とも内在神ともとれるところがあり、定かでないが、人格神の存在が前提とされている。

田中未来先生はキリスト教主義学校に入り、聖書を読み、

無償の愛としてのアガペーの愛に強い憧憬をもちながら、キリスト教的人間観の根底にある原罪の思想に批判的であった。人間を善とし、人間を限りなく信頼したルソーは、神の善性をもつてその根拠とした。田中先生は、ルソーのこの神の善性への信頼に共感し、自らの神を求め、ルソー研究に求道の手がかりを求めておられたと言えよう。

(二〇〇二年十月発行 田中未来先生追悼録より)

故・田中未来先生略歴

1921年6月	東京都文京区白山4丁目に生まれる
1934年3月	大井立会小学校卒業
4月	普連土女学校入学
1936年6月	立教高等女学校2年編入学
1940年3月	同 高等女学校卒業
4月	東京女子大学国語専攻部入学
1943年9月	同 大学卒業
10月	早稲田大学文学部哲学科教育学専攻入学
1945年5月	財団法人社会教育協会付属勤労女子青年錬成所助手
1946年4月	東京家庭学助勤教授(1953年3月まで)
9月	早稲田大学文学部哲学科教育学専攻卒業
1953年4月	白梅保母学園教授(1955年3月まで)
1955年4月	白梅学園保育科教授(1957年3月まで)
1957年4月	白梅学園短期大学専任講師
4月	同 短期大学教務課長(1961年9月まで)
1962年12月	同 短期大学助教授(1965年6月まで)
1965年7月	同 短期大学教授
1966年4月	同 短期大学保育科長(1970年3月まで)
1971年6月	同 短期大学教務学生部長(1974年3月まで)
1974年6月	同 短期大学学監(1983年3月まで)
11月	同 短期大学学長代行(同年12月まで)
1983年4月	同 短期大学学長(1989年3月まで)
1989年3月	同 短期大学教授退任

本学紀要第25号より転載(編集委員会)